



Founded in 1863



# 明治学院 日本はじめて物語

「明治学院 日本はじめて物語」ようこそ。

明治学院はミッションスクールでは日本で最も古い学校であり、  
米国とスコットランドの三つのミッションの合同により、国際的に成立した学校です。

英学の学風と自由の風土を持つ、社会のための学校です。

横浜のヘボン塾・ブラウン塾・バラ学校、築地の築地大学校・東京一致英和学校・東京一致神学校などの  
学校を経て、明治学院へとつながり、長崎の東山学院も合併しました。

伝統のある学校のため、他の学校にみられない「日本はじめて」の事項は

学術・文化・教育・社会事業やボランティアなど多様です。

そのひとつ一つは、いまでも続く明治学院の人びとの精神をよく表わしています。

楽しみながら明治学院の誇れる「はじめて」を知っていきませんか。

明治学院 歴史資料館

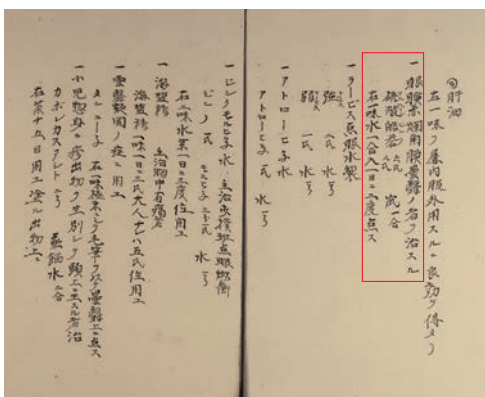
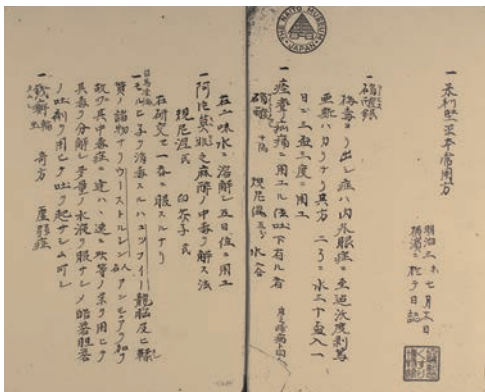




J.C.ヘボン

# 民衆を救った はじめての西洋式点眼薬

## ●「米利堅平文常用方」の目薬処方各種



内藤記念くすり博物館所蔵

眼病を患う神奈川戸部浦の漁師・仁介は、洲干島弁天へのお百度参りの途中、散歩中のヘボン博士に出会い、その点眼薬で眼病から解放された。仲間の漁師たちの眼病も次々と全快すると、一切の治療費を受け取らないヘボン博士を神奈川宿の名主は「実に珍しき異人に候」と記録している。

日本人がはじめて出会ったこの西洋目薬の薬効はすばらしく、眼病の多かった当時、すぐに人々の評判となった。当時の医学は漢方が主流であり、「症」を診断とするため、眼病も煎じて服用する生薬が中心であったが、ヘボン博士の薬は直接眼球に滴下する点眼薬であった。

ヘボン博士の目薬は数種類記録されるが、仁介に使用したものは硫酸亜鉛(Zinc Sulfate)を主成分としている。

自らも眼病の治療を受けながらヘボン邸に住み込み、『和英語林集成』の編纂を手伝った岸田吟香は、この目薬をZincの中国語の表記から「精錡水」と名付けて1867(慶応3)年に自ら販売し著名な目薬となった。

横浜の米商正田作次郎はヘボン塾で英語と処方を学び、群馬県館林で「米文の精錡水」として無償で配布して評判を呼んだ。

またヘボン博士は長く仕えた牧野糸七とよし夫妻の労に報い処方と薬品を授け、夫妻は「平文の目薬」として現横浜中区吉田町にあった里見松泉堂から販売した。

ヘボン博士の目薬の成分は、いまでも日本薬局方に「硫酸亜鉛点眼液」として登載され、市販薬にも使用されている。

## ●「精錡水」の看板







ヘボン夫妻

## 「近代男女共学」のきっかけ ヘボン塾

男女共学は第二次大戦後に、1947(昭和22)年の教育基本法が「男女は、互に敬重し、協力し合わなければならない」との趣旨で定めた制度である。

戦前は文部省規則で男女は別学と定め、カリキュラムも男女別とされた。江戸時代は武家の男子は藩校に通い、庶民は読み書きを学びに寺子屋に通った。寺子屋は男女混在ではあるものの、進度もカリキュラムも到達度もばらばらで、出席も自由であった。

ヘボン博士のヘボン塾は、医学塾・英学塾・聖書教育の三つの性格を持ち、当初は医学生や幕府役人、商人の男子が学んだ。夫人クララはヘボン博士と共に彼らを教えていたが、教師の経歴を生かし、1863(文久3)年頃より男女共学(カリキュラムも教室も一緒)で英学を教えるようになった。教科書は米国の小学校用を使ったようであり、「ミセス・ヘボンの

学校」とも呼ばれた。

1870(明治3)年9月、フェリス女学院の創設者メアリー・キダーがヘボン塾に赴任時、担任したクラスも男女共学であった。彼女は「生徒たちは大変優秀で熱心に勉強しています。とてもアメリカの子どもたちの比ではありません」と記している。

ここにヘボン邸の中庭で写した塾生の写真がある。1874(明治7)年頃の日曜学校の風景と思われる写真には、男女が一緒に整列し中央に聖書とクララ夫人、右端に英語代講もした牧野よし(推定)が写り、生徒の年齢は幅広く青年に近い者も見受けられる。

新しい時代を迎えた開港地横浜での向学心が、このような近代的男女共学を成立させたといえよう。

●横浜外国人居留地 39 番・ヘボン邸中庭にて



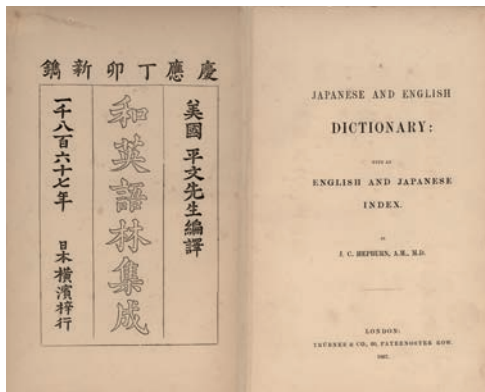
横浜開港資料館所蔵



J.C.ヘボン

# はじめての日本語 (和英) 辞典 『和英語林集成』

## ●『和英語林集成』初版中扉



## ●「Kokoro」のページ



ヘボン博士が編纂した『和英語林集成』は、日本語をローマ字で見出しとし、カタカナと漢字・品詞・活用形・語釈の英語解説・用例とその英語訳・類語を英語で解説した近代的日本語(国語)辞典である。

当時最高水準の辞書であった『ウェブスター辞書』の形式で、独自に言葉を集めて創作編纂され、近代日本語の成立過程が三版にわたる巧みに捉えられている。

1867(慶応3)年の「初版」は幕末の和語を豊かに捉え、1872(明治5)年の「再版」は新政府樹立時代の言葉を、1886(明治19)年の「第三版」は近代日本語成立期の言葉を捉えており、開国後の近代日本語辞典としては世界初の編纂でもある。

この後、比肩する辞書が登場するには、何と1896(明治29)年のブリックリー・南条文雄の『和英大辞典』までの時間を必要とした。

ヘボン博士は辞書の印刷にあたり幕府開成所の堀達之助や大鳥圭介等と協議したが、組版が複雑で細かいため木版では難しく、中国語聖書を印刷していた上海の美華書院(The American Presbyterian Mission Press)で活版印刷した。

国語学者金田一春彦氏が国語辞典の歩みを『和英語林集成』から説き起こしているのも、この辞書が和仏辞典・和独辞典だけでなく、初の近代的な国語辞典である高橋五郎著『和漢雅俗いろは辞典』1888(明治21)年や、大槻文彦『言海』1889~91(明治22~24)年の出版にも大きな影響を及ぼしたからである。

現代も『新潮現代国語辞典』、小学館『日本国語大辞典』などが『和英語林集成』の言葉を載せている。

明治学院大学図書館は、2006年より『和英語林集成』を中心とした幕末・明治期の辞書も含め『和英語林集成』デジタルアーカイブスをwebで公開している。

■『和英語林集成』デジタルアーカイブス  
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.html>





J.C. ヘボン

# 日本語の第四の表記 ヘボン式ローマ字

## ●初版の日本語音解説

There is still another form used, called the *I-ro-ku kana*, said to have been invented by *Kikaku*, or *Kōkōdōinshi*, a Buddhist priest and founder of the *Shin-gonshū* sect, who died in A. D. 835. This form of *Kana* was devised by its author in order to assimilate the letters, as much as possible, to the *Bonji*, or characters used in the sacred books of the Buddhists.

The Japanese syllabary consists of seventy-two syllables, as seen in the table; they are generally arranged according to the five vowel sounds, as follows:—

To complete this table the syllables, *A* and *a* have to be repeated. There are also amongst them several syllables, *i*, *u* and *e*, *i* and *u*, and *e*, *y* and *y*, and *o* and *o*, which are said to have represented different sounds in ancient times; but at the present time they can no longer be distinguished; in correct spelling, however, care must be taken that they be not written indiscriminately; there is a rule, established by ancient usage, to be observed in their use.

**THE SYLLABLES IN COMBINATION.**

The syllables commencing with the soft aspirates, *h* and *f*, and *y*, for the most part, lose their consonants, and their vowels combine with the vowel of the preceding syllable, sometimes forming a diphthong; as, *a-hi*, *ai*; *o-hi*, *oi*, or *o*; sometimes lengthening the sound of the first vowel; as, *u-sa*, *u-sa*; *to-ko*, *to-ko*; *hi-hi*, *hi*; *yo-ju*, *yo*; *ko-ko*, *o*.

Sometimes with the consonant of the first and the vowel of the second forming a new syllable, especially in writing the sounds of Chinese words; as, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*, *chi-yo*; or by still greater changes; as, *chi-yo*, *chi*; *chi-yo*, *chi*; *chi-yo*, *chi*; or by forming an entirely new sound; as *tsu*, *chi*; *tsu*, *chi*; *tsu*, *chi*.

In the following table all these changes are given in regular order, for the sake of those who may wish to consult this dictionary, and who may have the *Kana* only without the voice of the living teacher to direct them to the proper sound.

4 f fu	5 h hi	6 x xu	7 i i	8 u u	9 e e	10 y y
11 a a	12 i i	13 e e	14 u u	15 o o	16 o o	17 a a
18 a a	19 i i	20 e e	21 u u	22 o o	23 o o	24 a a
25 a a	26 i i	27 e e	28 u u	29 o o	30 o o	31 a a
32 a a	33 i i	34 e e	35 u u	36 o o	37 o o	38 a a
39 a a	40 i i	41 e e	42 u u	43 o o	44 o o	45 a a
46 a a	47 i i	48 e e	49 u u	50 o o	51 o o	52 a a
53 a a	54 i i	55 e e	56 u u	57 o o	58 o o	59 a a
60 a a	61 i i	62 e e	63 u u	64 o o	65 o o	66 a a
67 a a	68 i i	69 e e	70 u u	71 o o	72 o o	73 a a
74 a a	75 i i	76 e e	77 u u	78 o o	79 o o	80 a a
81 a a	82 i i	83 e e	84 u u	85 o o	86 o o	87 a a
88 a a	89 i i	90 e e	91 u u	92 o o	93 o o	94 a a
95 a a	96 i i	97 e e	98 u u	99 o o	100 o o	101 a a
102 a a	103 i i	104 e e	105 u u	106 o o	107 o o	108 a a
109 a a	110 i i	111 e e	112 u u	113 o o	114 o o	115 a a
116 a a	117 i i	118 e e	119 u u	120 o o	121 o o	122 a a
123 a a	124 i i	125 e e	126 u u	127 o o	128 o o	129 a a
130 a a	131 i i	132 e e	133 u u	134 o o	135 o o	136 a a
137 a a	138 i i	139 e e	140 u u	141 o o	142 o o	143 a a
144 a a	145 i i	146 e e	147 u u	148 o o	149 o o	150 a a
151 a a	152 i i	153 e e	154 u u	155 o o	156 o o	157 a a
158 a a	159 i i	160 e e	161 u u	162 o o	163 o o	164 a a
165 a a	166 i i	167 e e	168 u u	169 o o	170 o o	171 a a
172 a a	173 i i	174 e e	175 u u	176 o o	177 o o	178 a a
179 a a	180 i i	181 e e	182 u u	183 o o	184 o o	185 a a
186 a a	187 i i	188 e e	189 u u	190 o o	191 o o	192 a a
193 a a	194 i i	195 e e	196 u u	197 o o	198 o o	199 a a
200 a a	201 i i	202 e e	203 u u	204 o o	205 o o	206 a a

In the system of orthography adopted in this work, the *y* has been retained before the vowels *a* and *o* whenever possible, in order to separate the vowels, render the syllables more distinct, and follow the *Kana*.

The syllables *tsu*, (*y*) when preceding the strong consonant, *t*, *s*, *p*, and *f*, is elided, and the consonant of the following syllable doubled; as *tsu-tsu* becomes *ttsu*; *tsu-tsu* becomes *ttsu*; *tsu-tsu*, *ttsu*; *tsu-tsu*, *ttsu*.

*Ku*, (*o*) when following by a syllable beginning with *h* loses its vowel; as, *ku-hi*, *kuhi*; *ku-hi*, *kuhi*; *ku-hi*, *kuhi*.

The sound of the vowel *i* is often elided; as in *hi-to*, *hi-to*, *hi-to*, *hi-to*, *hi-to*.

日本語の表記は、漢字・カタカナ・ひらがなの三つだけではない。  
第四の表記としてのローマ字が存在する。

ヘボン式ローマ字は、日本語を英語で解説する日本初の和英辞典『和英語林集成』を編纂した折に、見出し語記載のために作成した日本語表音の表記法であり、ヘボン博士がヒアリングした日本語をそのままローマ字として書き記している。この方式は『和英語林集成』の第三版(1886年・明治19年)で確定した。

私たち日本人が気づきにくい「新橋 shimbashi」と「新宿 shinjuku」の「ん」の発音の違いを「m」と「n」とする表現や、同じサ行でも「さsa すsu せse そso」と異なって摩擦音の「し」は「h」を入れて「shi」とし、タ行の「つ tsu」にも「s」が入る。

ハ行の「フ」は「hu」ではなく「fu」と、発音の違いを聞き取って区別して記載する。

ヘボン式は日本語の音を英語音に近く表記しているため、英語が国際的に広く使われる現在は、日本語を示す際には日本語音韻規則に基づく訓令式よりも広く使われている。

	ヘボン式	訓令式
「富士山」	Fujisan	Huzisan
「地下鉄」	Chikatetsu	Tikatetu
「重要」	Juyo	Zyuyo

## ●街に溶け込むヘボン式ローマ字



三越 (Mitsukoshi)・高島屋 (Takashimaya)・松屋 (Matsuya)・松坂屋 (Matsuzakaya)・資生堂 (Shiseido)・三菱 (Mitsubishi)・三井 (Mitsui) などの老舗の商店や企業は、ヘボン式表記を使っている。

国際化時代を迎え、駅名・地名・会社名・製品名など、ローマ字は街にあふれている。そのほとんどが「ヘボン式ローマ字であり、駅名やパスポートの表記、道路標識にも使われている。」



J.C.ヘボン

## ヘボン博士の手術と 西洋義足のはじめて

### ●ヘボン博士手術図 橋本周延画



武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵

ヘボン博士は神奈川県宿の宗興寺を施療所として診療を行い、後に現山下町の横浜外国人居留地39番に自宅と礼拝堂・施療所を建築し、無料で診療を行った。

患者数はのべ1万人を超えるといわれ、横浜の俗語に「ヘボンさまでも草津の湯でも、恋の病は治りゃせぬ」と唄われて、身分に分け隔てなく接する態度と無償の精神により名医として親しまれた。

当時極めて多かった眼病をはじめ、チフス・胃腸病・梅毒・結核・皮膚病・ハンセン氏病・白内障・味覚障害など診療は多様であり、その薬剤処方<sup>めりけんへぼん</sup>は日本人医師の手で『米利堅平文常用方』として記録され、いまに伝えられている。

### ●義足の到着を伝える横浜新報「もしほ草」



ヘボン博士の最も有名な手術は、歌舞伎の女方三代目澤村田之助への下肢切断術である。美貌と美声、陰影のある怪しさと抜群の技芸を持った田之助であったが、舞台での外傷から足が壊死して脱疽となり、クロロフォルム麻酔下でひざ上から切断した。この手術は世間の話題を呼び錦絵や俗謡となった。

田之助は江戸の活人形師松本喜三郎の作った竹製<sup>つぎあし</sup>継足をつけて舞台に立つが思わしくなく、ヘボン博士に頼んで米国のセルフ社製のゴムと木製の西洋義足を取り寄せてもらった。

こうして田之助は横浜関内の下田座でお礼興業を行い、義足の舞台を演じると、大入りを続け人気も再び高まったという。

### ●「国性爺娑写真鏡」の田之助 豊原国周画







Founded in 1863



J.C.ヘボン

## はじめての聖書日本語完訳

### ●明治元訳聖書の数々



明治学院大学図書館所蔵

聖書の日本語全訳は、新約聖書がS.R.ブラウン、旧約聖書はJ.C.ヘボンが委員長となって翻訳され、1887(明治20)年に完成し「明治訳」または「明治元訳」と呼ばれる。

この各派共同事業での聖書翻訳委員会を立ち上げ中心に立ったのがヘボン博士であった。

聖書の翻訳は、普通の人が普通に読めることが必要であり、基本は話し言葉である。このため、たちまち大きな二つの壁が立ちふさがった。

一つ目は、当時まだ「共通日本語」が成立していなかったため、地域・階層・職業・男性と女性・話し言葉と書き言葉がそれぞれに異なっており、どの言葉に翻訳すればよいかという問題が発生し、新約聖書の翻訳は特に困難を窮めた。

二つ目は、愛や神、教会、精霊洗礼、隣人、義などのキリスト教の概念や用語とその背景に対し日本人の理解がまだ進まず、外国人宣教師自身が日本人を補佐人にして翻訳するしかなかったことである。

この苦闘の作業の中で、西洋言語学により日本語が解析され、日本語(国語)辞典や日本文法が成立する道にもつながった。

聖書はその後日本語の変化とともに改訳されていく。

1917(大正6)年新約聖書は近代日本語訳の『大正改訳』となり、第二次大戦後の1955(昭和30)年に再び現代日本語訳での新・旧両約聖書の再完訳としての『口語訳』が発行された。1987(昭和62)年にはプロテスタントとカトリックとの共同訳である『新共同訳』が三度目の完訳として発行され、現在もまた改訳作業が続けられている。

### ●ひらがな版・カタカナ版の明治元訳聖書



新約聖書は、ひらがな版・カタカナ版などもあり、共通日本語が定まらない時代に、より伝わる表現を実践的に試みていたことがわかる。

明治学院大学図書館は、和訳聖書のあゆみと各書の比較ができる「聖書と訳デジタルアーカイブス」をwebで公開している。

■ 聖書と訳デジタルアーカイブス

<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.html>